

「血脈の迸る—四踏 / 死闘 / 刺倒—」藤井マリは孤高に、淡々と己の舞踏を追究している。それは土方巽、大野一雄の舞踏と異なる。黒髪よりも艶がある姿に似るので、藤井の舞踏を『緑髪舞踏』と名付けよう。深谷正子の『動体証明』もまた、何事にも囚われない自由な発想に満ちている。ポスト・モダン、コンテンポラリーという名前が発生する以前から深谷は探求を続けてきた。全く接点の無かった二人が、2013年の初頭に向き合う。これは二人が築き上げた現実が衝突する事件である。「いま、ここ」に事件は必然なのだ。舞踏結社「青龍會」から出発して自己の舞踏を追い求める縫部憲治、版画制作が肉体と変化した岡田隆明という切れ味の鋭い刃物は、この二人にどう対峙するのか。流血は不可欠である。心は抉られ、身体は限界を求められ、生きて還れるのかは知らない。この死闘に立ち会わなければ、いま、ここに向き合うことが永遠に不可能となる。(宮田徹也)

藤井マリ舞踏公演

「フリーステップ」

日時：2013年2月11日17時～ 場所：d-倉庫
出演：藤井マリ(舞踏) 深谷正子(動体証明)
オブジェ：岡田隆明 縫部憲治
照明：神山貞次郎
音響：遠藤俊彦
舞台監督：ホワイトダイス
フライヤー：沼田皓二
料金：当日 2500円 前売/予約 2300円 学生 2000円
問合せ：marioz606@ezweb.ne.jp 090-3437-0708 (フジイ)

「夜のステップは記憶を刻む。いつか道端に描いた落書きは青い線を浮かび上がらせるか。白い表紙の本に指だけ触れて置き去りにした夢は新しい物語を囁くか。透明の闇に足音は消える」(藤井マリ)



「フルステップ」

「対決！」 青いフード付ジャージで体をやや前に傾け、舞台奥に向かって立ち、動かない。緊張が徐々に高まり沸点に達すると、やにわに動き出す。その緊張が体の中で蠢くのが見えてくる。時には弛緩して彷徨うところから踊りの「感覚」に入り、藤井マリは舞台上で覚醒する。その視線は何も映さない。見えないものを見輝く闇を注視してさすらい続けるマリ。コンテンポラリーダンスのグランマ、深谷正子との直接対決が楽しみだ。(志賀信夫)

「二重の新月 ほころびの段」 新年早々、最初の新月直後の祝日に首都圏はとてつもない大雪に見舞われた。そして翌2月の新月の翌日はやはり祝日。1月のそれを一般には成人の日と呼び、後者を建国記念日と呼ぶ。そのレギュラーで当たり前の休日にくく繰り上げ下げされた、本来はブルーマンデーでありながら、不意に訪れた休みとも取れるこの名付け難い高揚感をどう説明したらいいのだろうか？あるいは、新月にまつわる停滞ともとらえられるゼロへの魅惑的な誘惑をどう表現するのか？これは少なくとも、ダンスと言う現象への比喩ではない。また、そこにリアルにある予測図でもない。藤井まりと深谷正子の饗宴。そう言いになったところから、全てはほころび初めていく。しかも、これは本年の社会の暗喩でもない。二者の間にある共通のMをモンスターと読むのか？モニュメントと読むのか？少なくともモンスーンと呼び続ける気候学者には全く意味ない事だろう。黒く塗りつぶされたカレンダーに。さあ、その曖昧さを叩きつけたら。あなたは劇場の光の発信地へと明確に位置するだろう。(万城目純)

